



妙たえ の 光ひかり

通刊63号 復刊44号

2003年12月15日(季刊)

角田山妙光寺 発行

新潟県西蒲原郡巻町

角田浜 〒953-0011

TEL 0256-77-2025

雪吊り

木枯らしが吹く初冬の数日、境内の雪吊り作業が続いた。冬の間雪の重みで木の枝が折れるの防ぐため、雪国では欠かせない風物詩でもある。

ところがここ角田浜は日本海を流れる対馬暖流のせいで、県内で最も積雪量が少ない。移植に失敗して枯らしてしまったが、以前裏庭の風が当たらないところに大きな蜜柑の木があつて小粒ながら沢山の実をつけた。それほど他に比べて暖かい。さらに温暖化のせいも、昔より雪もずっと少なくなった。

近頃は無駄になることの多い雪吊りだが、昨年は思いがけず十二月早々に湿った重い雪が降り、庭木の枝が折れたお宅も多かった。それと中庭だけは屋根から落ちる雪があつて、これをしないと木が痛む。雪吊りを外すときの、あの春が実感できる嬉しさもいいものだ。

雪吊りの松を真中に庭広し

高浜 虚子

生きる貴さ（皆様の言葉から）

小川英爾

早いもので今年もあとわずかです。暮れようとしています。この一年、皆様から沢山のいい言葉、うれしいお便りをいただきました。朝日新聞の「天声人語」欄では月末になると「今月の言葉から」と題して、有名無名の人の心に響く言葉が紹介されます。それをまねて、皆さんからの声を一部ですが載せたいと思います。

一番の驚きは亡くなられた横浜のTさんからの几帳面な筆書きの葉書でした。『謹啓 山主様初め皆様ご機嫌如何にございますか。私この度安穩廟に入居させて頂いていただきます。尊い佛縁を得まして、日蓮大聖人様の御もとにむかひさせていただきます。生前は色々とお世話になりました。有り難うございました。このおちは何卒宜しくお願い申し上げます。皆々様益々のご康寿お祈り申し上げます。合掌。平成十五年四月九日没T八十六歳—八十を超えて歩いた人のみち 吾れふりかえりて悔いはなし—』

会社を定年後、自身は生きて帰れた戦争で、亡くな

った友人知人全ての人の菩提を弔いたいと、夫婦で軽ワゴン車に寝泊まりしながらお参りしたお寺が三千カ寺。夫人が極度の痴呆症になってからも、不自由な足でその手を引いて、風呂もトイレにも付き添う旅を続けられました。生前に用意した葉書に、娘さんが命日と没年齢を書き加えて投函された葉書だったので。年に二回は必ず妙光寺にお参りされた、あのお姿が目から離れません。

妙光寺の春は八重桜が見事です。「一月に亡くなった父ですが、来年の一周忌は少し遅らせてこの季節にしてもいいものでしょうか。このきれいな花を集まってくださる親戚の皆様は、ここで眠る父と一緒に見ていただきたいものですから」というHさんは、実家の亡父のお墓参りに来た娘さん。「ぜひそうなさったら」とお答えしました。

「東京に暮らす息子が突然に逝ってしまいました。葬式のことです」と電話してこられたのは新潟市のK

さん夫妻。「仕事があまりに激務だったのでしょうか、幼い孫だけを残して三十三歳の急死でした。私たちが入るつもりで用意したお墓だったのに、こんなことになるなんて。でも、ああ息子も妙光寺さんのあの基地に眠るんだと思っただけに心が救われた気持ちでした」と、四十九日の相談に見えて憔悴しきったなかに支えを見いだしたかのお顔で語られたのが印象に残りました。

若い方と言えば、埼玉のIさんは四十七歳でした。この三年の間に両親を送られ、自身も不治の癌を宣告されたのです。入院先の病院では職員に気を使い、さらに自分の葬儀に上京する新潟の親戚が少しでも楽なようにと、外出して夫婦で駅に近い斎場とホテルの下見まで。亡くなる数日前に夫人から「あとわずかなのでその時は葬儀をお願いします」との電話を寺にいた。残される妻と高校二年生の一人息子には「成人させることができなかつたことが悔やまれる。でも、あの世から二人を見守る自身は絶対にあるから心配しないで」と言い遺されたという。葬儀後も夫人と息子、お二人の穏やかな姿は気丈な性格だけではなく、悔いのない別れができたという思いからくるものかと感動させられました。

長野県のI夫妻は私の著書『ひとりひとりの墓』を

読まれて、安穩廟を申し込まれた方です。夫婦で癌を患い、ずっと闘病生活を続けておられる日々ですが、いつも明るく前向きなお手紙を頂戴します。もし可能なら八月のフェスティバルでお話していただきたいと思ってお願ひしたのですが、床を離れられない状態が続き実現しませんでした。

「妙光寺さんとめぐり逢えましたこと、夢のようです。本当に嬉しく、ありがたく、彼も私も気持ちがいいのであります。人は還って行く場所が決まりますと、こんなにも気持ちが悪くなつて安心できるのですね。：そのことに驚きながら、自分の笑顔が明るくなつていくことに感動します。結婚以来、病気に追われながら、自分の還って行く場所を、ずーつと胸の中で悩みながら探し続けていましたから：。そして『ひとりひとりの墓』に出会います。事後報告を受けた友人は「初めに見学してから、とは考えなかつたの？」と。その一冊を手にしたときから、それは決まっていたんだと思います。迷うことなど何もありませんでした。なんとという幸運をいただいたことでしょうか。云いつくせないほどしあわせと、感動でいっぱいです。」

フェスティバルの当日会場でIさんの代わりにこの文を読ませていただき、大病のお体でありながら「云いつくせないほどの幸せと感動でいっぱい」なんて言

える生き方にグツときて、涙してしまいました。

巻町のYさんは八月一日のお盆の法要に参列され、後日こんな葉書を下さいました。「私たち家族は引揚者で、両親は苦勞して幸せ薄くこの世を去りました。姉は北海道で六十六歳の若さで病死しました。次の兄は昨年九月群馬で急死しました。妹の私を愛してくれ私も尊敬していた兄です。角田を愛し妙光寺を愛して、毎年八月一日に墓参りにくるのをどのくらい楽しみにしていたでしょうか。(中略)倒れて二日目にこの世と別れました。私は長年看護婦をして、多くの患者さんの手を握り最期のお別れをしてきました。でも兄の手を握って最期の別れができませんでした。この世があるならあの世もありますか。せめて電話でも欲しい、いいえ夢の中に出て欲しいと、どのくらい思う日が続いたことでしょうか。お盆の法要に参列して心が安まる気持ちでいっぱいでした。私も最期は妙光寺で…と願っています。」住職として皆さんがいかにさまざまな思いで法要に参列しておられることかと、改めて感じさせられたお葉書です。

十月四日、待望の四菩薩像開眼法要でした。数年前までは四月の「ご判様」行事が二日間ぶつ通しでしたから、夜の法要が八時と十時半の二回。その後引き続きいて夜中十二時から朝まで、徹夜でお説教が続いたの

です。今回の開眼法要が、新本堂で初めての夜の法要でした。暗闇にロウソクの明かりの中、踊りと聲明と読経は見事に噛み合って、厳かで感動的な開眼法要でした。「いやー、生きててよかったと思つたよ。こんなありがたい法要は長年お参りしてきたけど初めてだ」と言つたのは、若い頃から世話人を勤めてこられ、信仰熱心さにかけてはこの人の右にでる人はないと、自他ともに認める巻町のKさん七十八歳です。やや頑固な気性だけに、口をついて出た言葉に嘘もお世辞もない正直な感想が住職としてはとても嬉しいものでした。

同じ日に戒名をお授けする二年目の授戒会をし、二十名の方が受けられました。後日記念にお名前を刺繍した略式袈裟をお送りしたところ、東京のSさんから「大変に立派な出来栄で、見ただけでも頭の下がる思いがいたします。妙光寺の檀信徒なればこそ此の光栄に浴することが出来たと、身にしみて一層の有り難さに身も心も奮い立つ思いで一杯です。幾許もない余命を大切にしながら、朝夕のお勤めに励みたいと存じます」という丁寧なお葉書をいただきました。

八十七歳を迎えた角田浜生まれのSさんは、九歳で両親と死別して叔父の元で育ち職人の道を歩まれ、そして戦争に。「戦地では非道なことをした」と懺悔される実直な方です。現在夫人とともに娘さん夫婦と幸せ

にお暮らしです。弟さんは一時北海道の祖父に預けられ、九州の寺に引き取られて苦労の後、佐賀県で日蓮宗の住職を勤め、先頃引退されました。お二人の人生も波乱に満ち、大仰に見える文面もSさんの誠実な人柄がにじみ出て、こちらこそ頭の下がる思いです。

いつも元気な看護婦のMさんから電話をいただきました。群馬の病院から伊豆大島の病院を経て、東京の大病院で婦長をお勤めのはず。ところが「脳動脈瘤というクモ膜下出血に至る病気になって大変だったの。でも勤務先の病院に新潟大学から来られた脳外科のすばらしい先生がおられて、命を助けていただきました。病院の仲間たちも本当によくしてくれて、つくづく自分の命が沢山の人の手で生かされているということをもっと知りました。これまで頑張り過ぎるくらい仕事してきたけど、少し、諦めない頑張らない”で行きます。ご住職も大事にしてくださいね」と、暖かい言葉に、ホッとしたりジーンときたりしました。

そしてこの秋ご主人の七回忌を、結婚したばかりの一人息子夫婦と本堂でお勤めした西川町のNさんからお葉書が届きました「先日は法要の儀、誠にありがとうございました。心静かに終えることができました。心に沁みるお話もいただき、これからまた前を向いて生きて参ります。ありがとうございます。

ございました」。添えられた実のついた紫式部の絵に晩秋を改めて実感し、さらに文面からはしみじみとした思いをいただきました。

他にも数多くのお便り、お言葉をいただき、今年も一年が終わろうとしています。各地で皆さんが一所懸命に生きておられる、そのおひとりおひとりと縁をいただき、それぞれに繋がっていることを尊く、ありがたいことと感謝しています。どうぞ良いお年をお迎えくださることをお祈り申し上げます。

『逝きし人は 再び帰らず／過ぎし日々も また戻らない／流転の中に 生きるいのち／はかなければこそ 充実したものにし／短ければこそ 確かなものにして／悔いなき一生を願いつつ 逝く年の瀬に立つて／生きる貴さを しみじみ思う』
(前身延山法主、岩間湛良猊下著『共に生き共に栄える』より)



元気に一人暮らし



速水 ア イさん（八十才）



「昔の苦
 労を思うと
 こんな幸せ
 な時代が来
 るなんて夢
 のようで
 す。丈夫で

では楽しかったですね。戦争中は船が
 来なくて三カ月間米がないなんてこと
 もありました」。昭和二十年、戦争が
 激しくなって最期の引き揚げ船で帰っ
 た直後に、サイパン島の玉砕をニュー
 スで知った。

いられるせいもあるんですけどね」と
 語る速水さんは、七年前にご主人を亡
 くし元気に一人暮らしを続けている。

「若い頃働かせてもらった衣料品店か
 ら、今もズボンの裾上げや直しの縫い
 物仕事をもらって小遣い稼ぎもしてら
 んです、わずかでですけどね」。

白根市で生まれて女学校で洋裁を習
 い、生真面目な性格を見込まれて卒業
 前に先生の勧めで南洋の島国パラオに
 渡ったのが十八才。「戦争が始まるま

婦人服縫製の仕事があつて巻町に来
 て、パラオで働いた店の紹介でやはり
 巻町に働くご主人と結婚された。ご主
 人の家の菩提寺が上越市高田にある日
 蓮宗で、お墓は現在もそちらにある。

十三年間子供に恵まれず「仏様に祈
 りました」と。姑さんも昔堅気の厳し
 い人で、またそういう時代でもあつた
 が口さがない近所の年寄りの目も気にな
 った。さらにご主人も性格はいいの
 だが生来の生真面目、口下手、社交下
 手で、アイさんも外に出るのをつい遠

慮した。

「その姑さんが亡くなって葬式のあ
 と妙光寺の前のご前様が『ご苦労様で
 した』とおっしゃってくれたんです。
 とても嬉しかったこと覚えてます」

「妙光寺は姑さんの実家の菩提寺で
 したから、元気な頃は年に一、二回タ
 クシーに乗せてお参りしました。そう
 そう昔お寺が洪水で、前の松林を掘っ
 て排水するときは私が中学生の息子に
 スコップを持たせて行きました」。

姑さんが亡くなって妙光寺檀信徒の
 集まりの「巻講中」に参加するようにな
 ったが、夜のせいもあつてなかなか
 出席できない。ご主人が亡くなって看
 病もなく、集まりが日中になったから
 毎月出られるように。今妙光寺の行事
 には、友達の都合が悪いと一人でタク
 シーに乗ってでも必ずお参りしている。

「新潟市に暮らす長男はしょっちゅ
 う来て、ときには高田のお墓参りにも
 連れてつてくれます。千葉にいる次男は
 年二回必ず家族で顔を見せてくれます。
 本当に幸せな毎日で感謝しています。」

四菩薩像開眼法要他

十月四日、新本堂に上行菩薩、安立行菩薩、浄行菩薩、無辺行菩薩の四菩薩像が納まり、開眼法要を営みました。

午後から戒名をおつけする授戒者の研修、授戒会、日蓮聖人ご命日のお会式法要、記念法話。そして夕闇迫る五時半、佐渡を拠点に世界で活躍する『鼓童』の一員、小島千絵子さんが優



雅に舞いながらロウソクに明かりを灯す中で始まりました。小島さんは笛を演奏した中野亘さんの友人で、この日ラジオ出演で新潟にいたことから妙光寺に馳せ参じてくださったものです。

そしてあたかも仏様が天から降りてきそうな、そんな澄み切った音色の中野さんの笛で式衆が入場。式衆は住職以下、日蓮宗大荒行道場遠寿院の戸田伝師ほか日蓮宗僧侶。そして聲明（しようみょう）に毎年ヨーロッパ公演を行なう天台宗七聲会の皆さん。そうそうたる顔ぶれです。

この天台聲明は歴史も長く、さらに最近は若い僧侶が熱心に研鑽を積んでいて、それは見事に荘厳な声が堂内に響きました。さらに開眼の戸田伝師による気迫のこもった修法で、きりりと



引き締められました。

天気も良かったのですが、そのぶん夜は冷え込みました。しかし一時間半の法要中、寒さも時間のたつのも忘れてしまう、そんな厳かできれいで感動的な開眼法要でした。

地元県内はもとより、北海道、関東関西と、各地から総勢三百名ほどの出席をいただきました。

三重塔の修復方針決定

九月二十三日、お彼岸法要に参詣の皆さんが参列して、修復解体の法要を営みました。その後施工に当たる見附

市の業者が、約二十名で丸一日かけて三つに分離してトラックで工場に運びました。一カ月かけて解体しながら歴史調査を進め、十一月六日に役員、顧問二十名で現地に見学し、工事の監修をお願いした元新潟県文化財委員で建築家の山崎完一さんの説明を受けました。

それによると「建築年代等の記録はなかったが、様式から三百年程前の塔と推定される。総高さ六メートルと小振りな塔だが、構造的にはまったく手抜きのない建築物で、材料も最高に吟味した総ヒノキ作り。さらに内部も外部も漆塗り金箔張りの豪華絢爛な工芸品でもある。相当財力のある人が作らせた物であることは間違いない。当初は屋内にあったはずだから、漆塗り金箔張りで復元するなら屋外には置けず、鞘堂に納める必要がある」とのことでした。

説明に引き続いて役員会議を開き、業者からの見積り金額をもとに修復方針を相談しました。その結果、豪華に



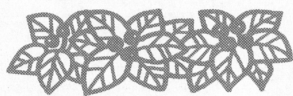
移動のための分離作業



分離してさっそく採寸



工場での説明





山崎元県文化財委員からの説明を受ける役員

復元して鞘堂に納めては誰でも自由に
 拝めなくなるし、鞘堂の位置も問題。
 さらに予算上もとても無理なので、文
 化財指定される範囲で屋外に置いても
 問題ない修復にする。境内の中心に置
 いて塔の周辺を予算内で造園整備し
 て、建物と境内が全体に映えるように
 しようと決めました。

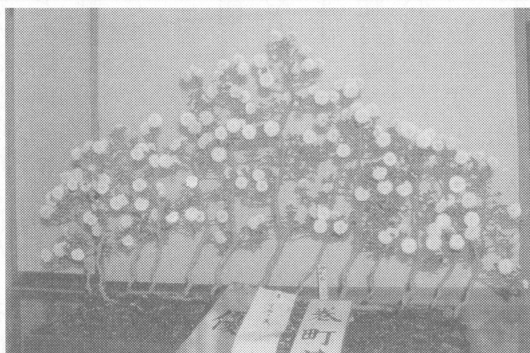
修復作業に一年かかります。春に造
 園工事をし、秋に塔を戻すと山門を入
 って見る境内の眺めが一変します。楽
 しみにしてください。

この工
 事には東
 京の小黒
 トメさん
 から多大
 なご尽力
 をいただき
 ました。

菊花の展示

秋の恒例、今年も巻町の内藤清さん
 が丹精込めた菊花を展示奉納くださ
 いました。

今年
 は「巻町菊
 花会優等
 賞」の逸
 品で、玄
 関を訪れ
 る方々が
 口々に感
 嘆の声を
 あげてい
 ます。



大玄関に飾られた内藤清さんの菊

里山の整備進む

境内南側に隣接する山は妙光寺の
 所有地がほとんどありません。所有
 者もまったく手入れをしませんか
 ら、竹が伸び放題、杉も一部立ち枯
 れて倒れています。全国どこでも同
 じ状況ですが、最近では自然に親しみ

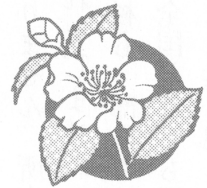
汗を流すのが楽しいというボランテ
 イアが増え、里山の整備も進みつつ
 あります。

境内に隣接する山でも、NPO新潟
 県溪流再生フォーラムが今年春に山野
 草を植え、引き続き下草刈り、立ち枯
 れた木の伐採等を継続しています。地
 権者の理解も徐々に得られて、実施面
 積も拡大しています。いまはまだあま
 り目立たない小さな動きですが、継
 続は力で、そのうちさらに気持ちの
 いい緑が眺められることになるでし
 ょう。



境内脇の杉林での作業風景

専門家が控えています



八月のフェスティバルで、老後や死後を家族血縁に頼れない時代だから、遺言など法律できちんと守りを固めて置く必要性が語られました。そしてその場で「相談だけなら無料だから、ぜひ近くの公証役場を利用してください」との案内を、講師で全国公証人連合会広報部長の清水勇夫先生がされ、新潟公証役場の和田公証人さんが「遠慮なく訪ねてください」と言ってくださいました。

公証人とは裁判官や弁護士などの法律の専門家が、民間の金銭や土地建物の貸借契約、交通事故や離婚の賠償金契約、遺言証書等の作成をする国家公務員です。

これに対して「切実な話題が具体的に説明されて、身にしみて実感された」

という声を多数いただき、その後実際に新潟公証役場を訪れた安穩会員檀信の方がかなりおられました。それほど相続などの問題が世の中に増えていることも事実ですが、転ばぬ先の杖で、遺言書等できちんとする方も増えているということです。

相続問題といっても財産だけでなく、葬儀やお墓、仏壇といった祭祀相続もあります。また生前でも病氣、とくに痴呆症になったら財産管理ができなくなる心配だってあります。

心配事、わからないことはあるが何をどうしたらいいのかがわからないという方もあります。また個人の生き方や家族の事情がこれまでの社会の考え方とますます離れて来たせいか、悩みを抱えて安穩廟を申し込みに来られる

方が増えています。世間一般では旧い体質のままのお寺もたくさんありますが、妙光寺ではひとりひとりの生き方、死の迎え方を考えます。さらに現在の法律は、個人を中心に考えていますから力になります。

まずは妙光寺にご相談ください。現状では相談受付だけですが、前述の公証人の先生方の他に弁戦士、税理士、司法書士、社会福祉関係、良心的葬儀社、等々県内外で妙光寺の紹介ならと、協力くださる専門家も控えています。

住職の不在が多く忙しそうだが、という遠慮はいりません。不在でしたら「電話ください」と番号をお伝えください。こちらからお電話します。それでもしにくいようなら電話相談日を設けることも考慮しています。

『杜の安穩』が好評で、来春に二期目として八十区画を増設します。

二十年が過ぎ……。



小川 なぎさこ

まったく一年の過ぎるのが早いこと

といったらありません。今年は時間の使い方がうまくいなくて、仕事に追われる毎日でした。理由はなんとなくわかつてはいるのです。集中力に欠け、同じ仕事なのに時間がかかりすぎてしまったこと、やる気がいまいちでノリが悪かったことなど。たぶん更年期にさしかかっているのではないかと自分では思います。

また順調に、お寺を維持する体制がととのってきたことで気がぬけたことでもあります。貧乏なお寺を少ない人手でなんとかしなくてはと、結婚以来このかたずっと肩に力を入れてきました。それがみなさまの妙光寺へのご協力でこのように良い方へ変わってきましたから、精神的に随分楽になりました。

た。

先日夕食の時に、

私「お父さんは（住職のこと）妻の私がいうのも変だけど、お坊さんとしては立派だと思うよ」

娘たち「ふーん」

私「だってね。まず欲がないでしょ。この洋服なんて十年以上着ているんだよ。格好なんてきにしないでさ。えらいよね。」

娘たち「でもさ。それは分かるけど、夫としては落第点だよねー。」と

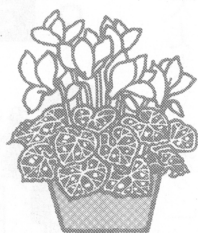
平然と言ったのけたので一瞬シーンとなくなってしまいました。

私「ヒエツエエー」

あわてて住職の顔色をうかがいましたが、別段気にする風でもなく、平然としていました。親子ですね。

確かに坊さんとしてさまざまな仕事に献身的に取り組む姿は、これぞ仏教の教え！と思うからこそ二十年も連れ添ったわけです。でももしこの人が娘の婿だったらすぐ娘を引き取るかも。

この秋結婚二十年を迎えて、へー？という感じでしかないけれど、私自身も欲がなくなり、気が長くなり、体力はなくなっただけで精神が強靱になつてきたように感じます。来年は穏やかな気持ちでやっつていこうと思います。実は銀杏をまだ洗っていません。いくら気が長いといってもさぼりすぎ。大晦日には間に合わせますので、鐘を撞きにお出かけ下さい。もれなく本堂前の銀杏の実を差し上げます。どうぞ良いお年を！



行事案内

お札配り

十二月に入り住職と鎌田が手分けして来年のお札を持ち、県内檀信徒宅にお経に伺っています。事前連絡が難しいので、電話いただければご都合に合わせます。

大晦日、除夜の鐘

大晦日十時半から除夜法要。引き続き十一時四十分頃から鐘つきです。どなたでも先着順にお願いいたします。縁起物が当たる抽選もあります。「お焚きあげ」もあります。古いお札や仏具をお持ちください。

元旦、年始参り

元旦と二日の朝九時から午後四時まで、ご年始の受付をしています。新年は本堂のお参りから初めましょう。

年回忌のお知らせ

平成十六年に年回忌のあるお宅へは直接お知らせします。年忌札の届かないお宅は来年法事が当たっていないということですので。

星祭り祈願

来年一年間の家内安全、健康、幸運を祈願する『星祭り』は一軒二千円です。新規の方のみ、家族全員の氏名、性別、生年を添えてお申し込みください。祈願の上、家族ごとにひとりひとりの星を記入したお札を差し上げています。

位牌檀への位牌安置と月命日ご回向

本堂脇の位牌檀に、申し込みされたお宅の位牌を安置して、毎朝のお勤めでその日が命日に当たる精霊のご回向（えこう）をしています。費用は年間一万二千円。継続の方は十六年度分を三月までにお願いたします。妙光寺という永代供養料は、この三十年間分（三十万円）ということですので。



あ・と・が・き



「お体の調子大丈夫ですか？」前回に体調不良と書いたせいで、皆さんから心配のお言葉をたくさんいただきました。本当にありがとうございます。

秋の検診で一年前の大腸ポリープ切除の跡はきれいになっており、その他も異常なしでした。今は快調そのものです。ご心配をおかけして申し訳ございません。

私事ついでに、私は五人兄妹の末で兄がおり、それも娘三人です（うちは四人娘）。上二人は嫁ぎ、三番目がハリウッドで映画女優を目指しています。何年か前の夏に妙光寺で手伝ってくれたとき、酒の席で檀徒のひとりから「今から貰っておくから有名になつてね」と言われて、Tシャツにサインを書いていたこともあります。それが今人気上映中のアメリカ映画『ラストサムライ』に若い芸者役で出演しているそうなんです。実力のほどはわかりませんが、会社とも契約できて仕事も増え、永住の覚悟とか。ご覧になる方がありましたら気にかけてみてください。身内の宣伝でした。

（小川）